

## 1. バイバイ…

(正面・遠)

(少し寂しそうに、過保護気味で)

バイバイ。……これから、一人で頑張ってね。

……やだ、そんな顔しないでよ。

もしかして、忘れ物？

最後に洗濯して干した物も、さっき畳んで詰めたし、歯ブラシも、

引っ越しの荷物に入れなかったものは、そのスーツケースに入れたわよ？

なるべく増えないようにしてたみたいだけど、人一人が数ヶ月生活したら、

物って結構増えるのね。

私もいつかこの部屋を出る時になつたら思い知るのかな…。

そうだ！

(正面・近)

この間有名な神社通りかかったから、お守り買ってきたの。

祀ってあるのは仕事運と金運って言ってたから…、今一番君がほしい物でしょ？

……あ、今ちょっと笑ったでしょう？

おばあちゃんみたいとか、思ったんでしょ！

ちょっとでも運が向くようになって思って買ってきてたけど…、必要無いなら私が使うわ！

……私には必要無いんじゃないかなって？

そんなことないわよ。

私は君よりすこ～しだけお姉さんだから、一言だけ言っておくわ。  
お金は自分を裏切らない。  
しっかりと稼いで、地に足を付けて。  
自身を持って、自分の信念を曲げずに働いていたら、いつか報われる。  
誰かが絶対に、君を見てるから。  
……勿論、私も。  
君がこの部屋を出でていっても、見てるから。  
君が頑張ってるって、信じてるから。  
その言葉が欲しくなったら、いつでも連絡して。

(正面・密着)

やだ、泣きそうになんかならないでよ！  
確かに君は、今まで踏んだり蹴ったりで…なんていうか、私の周りにここまで運のない人いなかつたから。  
だから、支えてあげたくなったの。  
すごく真っ直ぐで、嘘のない目だった…。

(左耳・囁く)

こうして耳元で話しかけると真っ赤になるところとか…  
……フフッ、まだ真っ赤になるのね。  
だから、悪い人じゃないって、すぐに分かったの。  
そうじゃなかつたら、知らない人をいきなり家になんて入れないわよ。  
女の一人暮らしって、結構大変なんだから。  
誰かについてこられてないかとか、ドアも極力うす～く開けて、閉じたらすぐに鍵とドアロックもして。

そんな人間がよく、見ず知らずの男を居候させたなって、思うでしょ？  
……私も、自分で自分に驚いた。  
私、いつもはトラブルからはなるべく遠ざかって歩きたいタイプなのよ？これでも。  
そう思わなかつたでしょ？

(正面・近)

それは、君だったから。  
不思議な感覚があつたのよね。  
勿論、こんな風に顔を真っ赤にすることが新鮮だつたつてこともあるけど。  
そうだなあ、私の周り、今、打算的な人ばっかりだから。  
出世するには、人を蹴落とすには、お金を誰よりも稼ぐには。  
あと…、どれだけいい女をステータスとして、他人にひけらかすことが出来るか。  
そんな男ばっかり。  
だから、君みたいなタイプが物珍しかつたのかもしれない。  
どこまでがセクハラにならないかとか、どうしたらやれるかとか。  
そういうことしか考えない男ばっかりな中、君は私に一度も迫つてこなかつた。  
だから……信頼出来たのよ。

(正面・遠)

ごめんなさい。  
せっかく新しい生活に旅立つときだって言うのに、引き止めちゃつて。  
でも、少し自信なくしたかも。  
これだけ近くに言っても、顔を赤くするだけで、襲つても来ない。

私、そんなに魅力無かったかな？  
…ふふふ、冗談。  
そんなことしたら、すぐ出て行けって言われるからでしょう？  
わかってるよ。

(少しうつむいて)  
こんな出会いじゃなかったら……、もっと違う関係になれたのかな。

(正面・近)  
今のナシ！  
気にしないで、ほら！そろそろいかないと、電車混むよ？  
スーツケース持って満員電車に乗ったら、ひんしゅく買うから気をつけて！  
…あー、もう。私心配しすぎてお母さんみたいになってる。  
それじゃ、今度こそ…バイバイ。

SE:マンション一室のドアを開いて閉じる音

(正面・遠)  
あーあ、本当に行っちゃった。  
これからただいまって…、また言う相手が居なくなっちゃったな…。  
防犯も、気をつけなきゃ。  
あんなに急いで出でていかなくとも良かったのに…。  
ずっと、住んでくれても…良かったのに。

(ナレーションここから)

君との出会いは偶然だった。

君は不幸のどん底で、私は心が空っぽなときだった。

お互いのへこんだところを、傷をなめ合いながら補っていたのかもしれない。

私は…それで良かったのに。

君はこのまま甘え続けるわけにはいかないと言って、出ていった。

私はもう少し甘えさせてほしかったんだって…

気付いたのは、君が出ていってからだった。

こんなことなら、もっと誘惑しておくんだった。

自分の嫌いな手を使ってでも…、私のところから去る選択肢を無くしておけばよかったです。

せっかく君が新たな一步を踏み出したっていうのに…

心の底から喜んであげられない自分が居た。

ごめんね、君の出発を素直に祝ってあげられなくて…。

(ナレーションここまで)

SE:騒がしいくらいの蝉の声(しばらくして FO)